

続

徒然
つれづれ

政治を語ろう

桑野 巍

「政治とは何ぞや」と聞かれても私は答えに窮する。アダムとイブの共同生活時代と異なって、現代のように人間の数が増え生活様式が複雑化してくれば利害対立や闘争も進行してくるから「これらを治めることが政治」と答えるのがやっとのことだ。自己と他者、私益と公益、人間の相互依存関係にも政治が絡むこともあるから、政治はよく分からず「これは曖昧語の一つだな」と勝手に位置づけてみたりすることもある。

ところが「現実の政治」は情報過多で、先輩、同僚、友人や家族の間でいつも話題に上る。その場では政策の問題ではなく政治家の問題にすり変えられ、あくどさ、自己保身、厚顔、演技、捏造^{ねつぞう}などを連想させ、批評が先に立つから「目線が違うところで動いているのが政治」で意見が一致する。それどころか有権者は政治の動きを冷たい目で見たり、政治家を軽蔑したり、無関心を装うから無気力やあきらめを生み選挙の投票率低下につながる。政局は面白いが政治からは遠ざかっていくということか。政治学者がいくら高等な理論^{ひれき}を披瀝しても現実の政治運営に大きな影響を与えることが少ないのはそのためだろうか。

先刻お会いした政治学専攻の大学教授は東京都内の小学校からの依頼で同校を訪問した時の話を聞かせてくれた。彼は子どもたちに政治のことを教えるのは年長者の義務だ、と思って子ども目線に合わせて話したそう。日本の政治の不安定、多すぎる選挙、政治家のリーダーシップなどについて話したあと、質問を受けた。「首相がお腹が痛いから辞めたと親から聞いたが、ぼくはお腹が痛くても登校した。首相がコロコロ変わるのはどうしてか」と胸を張る小学生にどう答えればよいか迷ったらしい。選挙制度や議員定数の削減、派閥とは何かなどの質問も出て、彼は嬉しそうな顔をしつつも「参った、参った」と言った。

私はテレビやラジオのニュースは出来るだけ見た

り聞いたりするが、国会中継もニュースのうちと見聞きする。変な番組より面白いからだ。ところがその内容たるやおよそ国民生活と遊離したお粗末さで愛想をつかすこともある。次元が低い、揚げ足取りの発言が多いなど感じながら、その昔国会に出入りしていたころを思い出した。それは国会内の議員食堂の風景で「安くておいしい昼食を食べ、元気だけはよい。これならヤジも怒号も飛ばせる」と思ったものだ。食欲旺盛はよいとしても中身の薄い議論なら土曜日曜に休日を返上して思う存分やり合えばよいのと思ったこともあった。

われわれ有権者は国会議員選挙で「投票すればそれでおしまい」という気持ちを持ち続けていなかったか、と問われれば反省も必要だ。政治の情報は乱舞し玉石混交の世界なので情勢を見極めることは難しいからか「政治不信の原因はマスメディア」という輩も多々存在するから、ここでも反省しなければならない。メディアは無暗^{むお}に政局を煽るなどというべきか。

ただ政治不信は日増しに強まりつつあり「もう政治に期待してもアカンで」という有権者が増えているのも心配だ。政治不信は民主主義にはつきものだが「政治家は国民に幻滅を与えてはならない」という大原則は護ってもらいたい。いまこそ国家国民を思いやる政治が必要だと思うが、どうだろうか。

一人の有権者として当面の課題をあげるとするならば、①財政の健全化方策②景気対策③領土問題を含む対外政策④国会議員の定数削減を含む国会改革などで、超党派で取り組んでほしい。そして「誰が責任を取るのかがわからない時代」を乗り超え、国民の期待に応えてもらいたい。こうした諸課題の解決に勇気を持ち、生命をかけてほしい。せめて有権者の8割以上が政治家を尊敬し、政治家から何かを学び取りたいという風潮が起こることを望む。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）